

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

論 文 題 目

センター試験・SAT・AP 試験「世界史」で測定される
歴史的知識と歴史的思考力

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教授	渡邊 雅子
名古屋大学高等教育研究センター 教授	夏目 達也
名古屋大学大学院教育発達科学研究科 准教授	柴田 好章
早稲田大学教育総合科学学術院 教授	近藤 孝弘

論文審査の結果の要旨

本論文は、センター試験「世界史」とアメリカの SAT (Scholastic Assessment Test) 科目別テスト「世界史」および AP (Advanced Placement Program) 試験「世界史」の設問を比較分析することにより、これら 3 つの多肢選択試験ではいかなる歴史的知識と思考力が測定されているのかを実証的に明らかにしたものである。センター試験では専ら暗記力が問われ、多肢選択式では歴史的思考力の測定は難しいという認識が半ば既成概念化されてきたが、これまで個々の設問の検証は行われてこなかった。その中で、センター試験「世界史」の設問を分析対象とし、各設問が測定している歴史的知識と歴史的思考力についてその分析方法を考案し実際に検証したのは本論文が嚆矢となる。またアメリカの 2 つの本試験は一般公開されていないが、AP 試験に関しては 2011 年にアメリカで開催された AP プログラムの研修に参加する事により、また SAT については College Board と直接交渉することで本試験問題を入手した。

以下、各章の概要を示す。

序章においては、センター試験は歴史用語や年代の暗記に規定され、歴史教育の両輪に配置される「歴史的知識の伝達」と「歴史的思考力の育成」のうち前者に偏重しているという半ば既成概念化されてきた認識を実証的に検証する必要性を提起している。すなわち本研究で取り組む課題として、多肢選択式試験で測定することが可能な歴史的知識と歴史的思考力を分析する枠組み及び分析方法を提示した上で、これまでのセンター試験についての認識は妥当であるのか、多肢選択式試験では歴史的思考力の測定は可能でないのか、可能ならばどのような歴史的思考力の測定が可能であるのかという 3 つの問いを立てている。

第 1 章ではセンター試験及び学校の試験で測定される歴史的知識と思考力を扱った研究を概観し、歴史的知識の質と歴史的思考力の構成要素を整理している。歴史的知識の質は、具体的な歴史事象を指す個別的・記述的な知識と、それらを基に複数の個別的・記述的知識を組み合わせ抽象化した概念的知識、さらにそれら複数の概念的知識を関連させてそこに何らかの時代解釈や価値判断を挿入した解釈的・評価的知識の抽象化へという展開が歴史学および歴史教育研究における共通理解として示される一方、歴史的思考力については歴史学では扱われず、また歴史教育研究によっても共通理解の構築には至っていないことを明らかにした。その背景として、東洋と西洋の歴史観及び歴史学と歴史教育の特徴を取り上げ、歴史的知識に偏重する傾向がある日本の歴史教育と試験の淵源を明らかにした。さらには、日本のセンター試験の比較対象としてアメリカの SAT 科目別テスト「世界史」および AP 試験「世界史」を取り上げる根拠と意義を述べ、SAT と AP 試験で測定されている歴史的知識と歴史的思考力についての研究成果を整理した。

第 2 章では、大学入試の時空間分析を行った。まず明治以降今日のセンター試験に

論文審査の結果の要旨

至るまでを歴史的に跡付け、次に国際的視野に立ってヨーロッパ（フランスのバカロレア）とアメリカ（SAT、AP）の高大接続に関わる試験制度とセンター試験制度を比較した。ここで得られた各国の試験制度に関わる知見は、3つの試験で測定される歴史的知識と思考力について考察する際の補助線となっている。

第3章では、本研究の調査方法と分析結果を提示している。分析の枠組みとしては、アンダーソンら（2001）による改訂版ブルームのタキソノミーを根拠に、歴史的知識の質「一次情報的知識（事実的知識）と二次・三次情報的知識（概念的知識）」の判別と、歴史的思考力の構成要素「史料批判（歴史学・歴史教育の土台）」の適用の有無を判定する2つの分析軸を設定した。この二つの軸が構成する4象限マトリクスの各象限に3つの試験の設問を一問ずつ個別に判定してコーディングする方法と実際の手続きを述べている。次に限定的に公開されているアメリカの2つの試験の分析対象年度とセンター試験の分析対象年度及び分析の範囲を明らかにしている。分析の結果は3つの試験が各象限に占める比率を計量的に処理し、グラフで表示している。その際3つの試験で活用された歴史的資料の種類も計量的に処理してグラフで表示している。さらには、AP試験の各象限比率の経年的変化（2002年、2007年、2011年）もグラフに示した。

第4章では、第3章で分析した3つの試験の設問がマトリクスのどの象限に多く配置されるかをレーダーチャートにして検証した上で、第2章の先行研究から得られた3つの試験の相違点を関連付け、それぞれの試験で測定される歴史的知識の質と歴史的思考力を比較している。センター試験とAP試験の対照性に注目すると、センター試験に見られる一次情報的知識の測定による正解の一義性の確保は、試験の設問文や提示資料に対する主観的な解釈等の挿入を防止する実践的な公明性の重視と試験問題の公開制度によって支えられ、それは集団準拠型試験に基づく1点刻みの相対評価に由来すると考えられる。他方SATとAP試験に見られる二次・三次情報的知識の測定による正解の多義性の内包は、歴史的思考力の測定の強化という理論的な到達度の重視と試験問題の非公開制度に支えられ、それは目標準拠型試験に基づく段階別の絶対評価に由来すると考察している。

終章では、序章で立てた3つの問いへの答えが示されている。センター試験の設問分析からは、一次情報的知識が問われているものの「史料批判の適用」を測定する問題が出されていることから、暗記一辺倒であるという従来の認識は一部修正された。しかしながらSATと比較すると、SATではセンター試験が測定していない比較的高次の歴史的思考力が機能して習得されたと考えられる概念的知識の測定が過半数を占め、同時に多様な歴史的資料を活用して史料批判の適用能力を測定していることが検証された。さらに、高等教育への接続をより意識したAP試験においては、SATより

論文審査の結果の要旨

さらに資料活用の割合が高く（SAT の 3 倍強）かつより多くの二次・三次的情報に分類される高度な歴史的知識を問うていることが明らかになった。さらに、AP 試験の経年分析からは、年を追うごとに史料批判の適用と高度な歴史的知識を問う問題の割合が増えている傾向も明らかになった。またセンター試験の史料が地図と絵・写真に偏るのに対して、SAT と AP は文献資料が半数以上を占め、かつ文献資料と組み合わせる地図、統計、グラフ、絵・写真から因果関係の理解や、解釈、評価までを測定する設問が出されていることが明らかになった。よって、多肢選択問題によっても抽象度の高い歴史的知識と歴史的思考力の測定が可能であることが検証された。

以上の研究内容に見られる本論文の独自性と学問的貢献として特筆すべきは次の 3 点である。

第一に、多肢選択式試験で測定可能な歴史的知識と歴史的思考力の分析の枠組みおよび分析方法を提示した点である。この分析方法を用いて日米の複数の多肢選択式試験の違いを計量的に数値化・グラフ化して客観的に示すことを可能にした。これにより、今後は他の歴史科目の多肢選択式試験、あるいは真偽式（○×）や穴埋め式試験等の分析への貢献が期待される。

第二に、歴史的知識の測定に偏重しているという半ば既成概念化されたまま論じられてきたセンター試験世界史の認識がどれほど有効なのかを検証した点である。史料の適用が一割程度認められたため、これまでの認識の修正を迫った。しかしその知識の質は全ての設問において一次情報にあたる事実に基づく知識であることが確認されたことにより、センター試験に規定されがちな世界史教育が記憶中心となっている現状を改める議論を開始する共通の基盤を確立した。

第三に、センター試験と SAT、AP 試験の 3 点比較を行うことにより、多肢選択式の問題では比較的低次の歴史的知識しか測定できないというこれまでの議論への反証を提示した点である。このことから、日本で実施可能な多肢選択式という試験形式で、高次の概念的知識と歴史的思考力を測定する設問作成の可能性を示した点である。同時に、史料批判と概念的知識を測定する場合、正解選択肢の一義性の確保が困難になる場合があるという限界も検証しており、歴史教育における多肢選択式試験の可能性と限界を明示した。

一方本論文に対して審査委員からは以下の疑問点が出された。

- (1) 世界史は他教科と比較しても求められる知識量は圧倒的に多く、それらを時間・空間の中に位置づけるには高度な認知力を必要とする。センター試験で問うているのは、歴史学的な能力ではなく、そうした情報処理的な認知能力なのではないか。
- (2) 歴史的知識を一次と二次三次情動的知識に区別しているが、それが「歴史学に

論文審査の結果の要旨

おける認識レベル」のことを述べているのか、「歴史学習において習得される知識レベル」のことを述べているのか、場合によっては「試験問題に答える際に活用される知識レベル」のことを述べているのかが明確でない箇所が見られるが、それらを同じと見ているのか、異なるものと見ているのか。

- (3) 静態的なものから動態的なものへと知識観が変化してきており、それに伴い、「理解し想起すること」も能動的な概念として捉えられるようになった。どの視点から語るかにより、知識の評価も変化しうる。本研究はその流れの中でいかなる立場を取るのか。
- (4) 試験の遡及効果はネガティブに捉えるのみで良いのか。教育的な大学入試のあり方も追求できるのではないか。
- (5) SAT や AP でも測られていない、つまり試験では測定することが出来ない歴史的知识と思考力とはどのようなものか。

これらの指摘に対して、博士学位請求者はよく認識しており、質疑に対する応答も具体的かつ適切なものであった。以上を総合して、本論文は歴史の多肢選択式試験に新たな視点と知見を提供するものと認められた。

よって、審査員は全員一致して、本論文を博士（教育）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。